

火を生む：元素の変容サイクルをめぐる日本と

旧世界全域と新世界とに広範囲に分布する宇宙論の証拠

ヴィム・M. J. ファン・ピンスベルゲン(ライデン大学、オランダ)

出発点はもちろん、原初女神イザナミが火神カグツチ(またはホムスビ)を出産する神話である。破壊と生産とは変容のサイクルにおいて諸要素間での二つの基本的な関係性である(この変容サイクルは、後の紀元前の千年紀後半には『易経』や道教一般という思想の主流の形を取るが、確実な対応例は古代ギリシア、古代エジプト、サハラ以南のアフリカ、北米などにも認められる)。副次的な関係性は促進／祝福と妨害／侮辱である。いうまでもなく、火は水、大地、空気—そしておそらく金属と木も—とともに基本的な元素あるいは場所である。イザナミが火神カグツチを生んで亡くなるという神話についてはアフリカ、古代ギリシア、北米などに極めて示唆的な対応例がある。その多くは洪水神話であり、またその多くが変容サイクル内部での一系列から他系列への置換を問題にしている。洪水とはそのうちの水の要素の部分をドラマ化したものに過ぎない。これらの対応例についての考察は日本の創世神話と神統記神話を新鮮な目で見直すよい機会となるだろう、多様な側面をもつ大陸横断的なむすびつきを理解する一助となるだろう。